

視察報告書

日時：2026年1月21日（水）9時～11時

視察先：特定非営利活動法人 黄金町エリアマネジメントセンター

住所：〒231-0054 横浜市中区黄金町1-4 先 高架下スタジオ Site-B

報告者：今井浩一

【視察目的】

横浜市中区・黄金町地区において実施されてきた「アートを媒介とした都市再生」の取り組みについて、その背景、実施体制、具体的施策、成果および課題を把握し、今後の地域再生政策・文化政策を検討するための知見を得ること。

黄金町は、かつて違法営業や治安悪化の象徴とされてきた地域であり、全国的にも「課題先進地」として知られていた。その地区が、アートと文化を軸に再生を遂げてきた過程から、エリア価値、ブランド価値の向上についての知見を得ること。

【概要】

1. 黄金町再生の背景

黄金町地区は、戦後の闇市形成を経て、長年にわたり特殊飲食店が並ぶ歓楽街としての性格を強めてきた。しかし、2000年代に入ると、警察・行政・地域住民による大規模な環境浄化が進められ、違法営業の一掃が図られた。単に排除するだけでは、街の持続可能性は確保できない。そこで横浜市は、文化芸術を活用した新たな地域価値の創出を再生戦略の柱として位置づけ、続いて「空き店舗」をギャラリー、アトリエ、ショップ、カフェなどに利用した。

2. 事業の枠組みと推進体制

黄金町における都市再生の特徴は、行政主導ではあるが、運営は中間支援組織が担う点にある。中心的役割を果たしているのが特定非営利活動法人 黄金町エリアマネジメントセンター。同センターは、横浜市、地元自治会、警察、不動産オーナー、アーティストなど多様な主体をつなぐハブとして機能している。行政は制度設計と補助金による財政支援を行い、黄金町エリアマネジメントセンターが現場の調整や企画運営など役割分担が構築されている。黄金町エリアマネジメントセンターはイベント・家賃収入も得ている。

3. 具体的な取り組み内容

(1) アーティスト・イン・レジデンス (AIR)

黄金町の象徴的な施策が、空き店舗や高架下空間を活用したアーティスト・イン・レジデンス事業。国内外からアーティストを受け入れ、一定期間地域に滞在しながら制作・発表を行う仕組みが整えられている。これにより、「空き物件の利活用」、「街に『制作の気配』を生む」、外部人材の継続的流入が同時に実現されている。

(2) 高架下空間の再編

京急線高架下という特殊な都市空間を、ギャラリー、スタジオ、ショップとして再編した点も黄金町の大きな特徴。従来は分断要因であった高架下が、むしろ回遊性と個性を生む場へと転換されている。

(3) 展覧会・イベントの開催

黄金町バザールに代表される国際的なアートイベントは、地域の認知度を飛躍的に高めた。単発の

イベントに終わらせず、日常的な展示や交流を積み重ねている点が、観光型アート事業との大きな違いである。

5. 成果と評価

黄金町の取り組みは、以下のような成果を上げている。「治安・イメージの大幅な改善」「空き物件の減少と新たな用途創出」「国内外からの来訪者・関係人口の増加」「若手アーティストの育成・定着」など。一過性の賑わいではなく、制作・居住・交流が日常的に存在する状態を作り出していることが、黄金町の最大の強み。

6. 課題と限界

一方で、課題も存在する。「事業継続に必要な財源確保」「地価上昇によるジェントリフィケーションの懸念」「担い手人材への負荷集中」など。

7. 感想

特殊飲食店が隆盛を誇ったのはわずか22年前だ。渡辺太郎さんが驚いていらっしゃったように、街の雰囲気はいっぺんにしている。特殊飲食店の店舗は改装され、ホワイトキューブの空間になっているが、建物の骨格だけは、当時の面影が残り、それをアーティストが面白がって使っているようにも見える。行政の補助金としては、アートだけではなく、多様なまちづくりものを活用しているとおっしゃっていた。前日に行った月見台住宅もそうだったが、行政が空き家・空き店舗の家賃は取らないことが民間の挑戦を生み出している。安い家賃の空き家・空き店舗に入居したのは、アーティストや自分の夢を叶えたいとする人々だ。コロナ禍以降、お金儲けではなく、自分らしい暮らし、生き方を模索している層も一定数いるわけで、そこに地域を盛り上げる、小さな経済が成り立っているのは、特筆すべき成果だと感じた。